

第22回防衛問題セミナー 講演録

演題：東日本大震災における自衛隊の活動・任務

基調講演 講師：防衛大臣政務官 下条 みつ 氏

第1部 東日本大震災における自衛隊の活動・任務

講師：東北方面総監部政策補佐官 須藤 彰 氏

第2部 東日本大震災の被災地における自衛隊の活動

講師：陸上自衛隊第12旅団第13普通科連隊長 1等陸佐 横山義明氏

【司会】

定刻となりましたので、ただいまより第22回防衛問題セミナーを開催させていただきます。

昨年3月の東日本大震災から、まもなく1年になります。

まずは、当セミナーを始めるに先立ち、今回の東日本大震災で亡くなりました方々のご冥福をお祈りするため1分間の黙祷を行いたいと思います。

会場の皆様、恐れ入りますがその場でご起立をお願いいたします。

(黙祷)

黙祷を終わります。ご着席ください。

ありがとうございました。それでは、主催者を代表いたしまして、北関東防衛局長の筒井和人より、開会の挨拶を申し上げます。

【北関東防衛局長 挨拶】

皆様、こんばんは。北関東防衛局長の筒井でございます。

本日は、第22回防衛問題セミナーにご参加いただきましてありがとうございます。主催者を代表いたしまして一言ご挨拶させていただきたいと思います。

私ども北関東防衛局の役割の1つが、国の防衛について国民の皆様方のご理解とご協力を深めていただくことでございまして、本日のセミナーもそのための貴重な機会と考えております。

今日のセミナーのテーマは東日本大震災でございます。東日本大震災につきましては、防衛省・自衛隊は、即応して活動するため、陸海空自衛隊による統合任務部隊を編成し、最大、全自衛隊約25万人の約4割にあたります10万人強の体制で、被災者の皆さんの救済あるいは被害復旧にあたったところでございます。

日本全体が、今や大地震の活動期に入ったと言われている今日、皆様におかれましては、災害は現実的な課題であるとお考えになっていることと思います。

更に、本日、ご来場いただきました皆様は、災害に対しての深い問題意識をお持ちのことと思います。

そこで、本日のセミナーでは、まず下条防衛大臣政務官に基調講演をしていただきます。引き続きまして、東北方面総監部・須藤彰政策補佐官及び陸上自衛隊第12旅団第13普通科連隊長・横山義明1等陸佐から講演していただくこととしております。

本日のセミナーが、皆様にとりまして実りあるものになりますことを期待しております。

最後になりますが、今回のセミナーを開催するにあたり、大変お世話になりました松本市を始め関係各位の方々に深く感謝申し上げて、私の開会の挨拶とさせていただきます。

本日はよろしく願いいたします。

【司会】

続きまして、ご後援いただきました松本市を代表いたしまして、松本市長の菅谷昭様、ご挨拶をお願いいたします。

【松本市長 挨拶】

皆さん、こんばんは。ただいまご紹介いただきました、菅谷でございます。

第22回防衛問題セミナーの開催にあたりまして、開催市を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

本セミナーは、その時々に応じた防衛問題につきまして、地域の皆様にご紹介いただき、自衛隊等の活動につきまして理解を深めていただく機会と伺っており、ここ松本の地で開催いただきましたことに対しまして、まずもって感謝を申し上げます。

さて、ご承知のとおり、まさに未曾有の大災害となりました東日本大震災及び福島第1原子力発電所事故からあと半月ほどで丸1年となるわけでございます。

復興への道筋が見えてこない中、未だ3千人余の方々が行方不明となっていること、また、30万人を超える方々が避難、あるいはまた転居を強いられていることなど、特に原発事故での影響は1年経った今でも厳しい状況が続いております。

そのような状況の中、防衛省並びに自衛隊におかれましては、いち早く震災対応及び原子力災害対応に職員を派遣され、その数は昨年12月の派遣終了までの間、延べ約1千70万人と伺っております。

連日報道されました人命救助活動や原発への放水作業など、本当に過酷な作業を行う隊員の皆様方の姿が今でも目に焼き付いております。

本日は、被災自治体との調整などを行われた東北地方総監部の須藤政策補佐官、被災地現場で指揮を直接執られた松本駐屯地の横山司令から貴重なお話があると思っておりますが、懸命に救助作業などに取り組まれた自衛隊の皆様には、被災者はもちろんのこと、全国民が感謝の気持ちで一杯であると感じております。

結びに、防衛省並びに自衛隊の皆様方の身の安全と益々のご活躍、合わせて本日ご参加の皆様方のご健勝、また被災地の1日も早い復旧、復興を祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

皆様、これより基調講演の準備をいたしますので、そのまましばらくお待ち下さい。

それでは、基調講演について始めさせていただきます。

講師は、下条 みつ防衛大臣政務官です。下条政務官ご登壇ください。

【基調講演 下条みつ防衛大臣政務官】

皆さん、こんにちは。お疲れ様です。

ご紹介いただきました大臣政務官・下条みつでございます。まず、こういう機会をこの地区で設けていただきまして本当にありがとうございました。また、今日に向けての準備ご苦労様でした。

特に今日は、皆様方の関心が深い東北の震災について、後ほど、現地の東北方面総監部で政策補佐官をされていて、実際に本も出している須藤さんと、実際に派遣されている松本駐屯地の第13普通科連隊長の横山さんから、ご講演いただけることになっています。

第13連隊は延べ約2万人以上が現地に行っていましたし、第306施設隊については、延べ1,900人近くが現場で人命救助、行方不明者の捜索、救援支援等、もう本当に数え上げたらきりがないくらいで、それぞれ福島、また、宮城に行っていました。今日はどうしてもお礼に来たかったです。

1つは、こういうセミナーは全国で行われていて、私もいくつかの場所に出て、お話しさせていただいております。

私は、安保委の理事をやっていた時にいろいろ現地に行った以外は、個人的な立場でしか行っていません。あえて言えば、個人的なほうが地元の方々にご迷惑がかからないということも含めて、そういう形で対応させていただいています。

そこで、自衛隊の災害派遣活動は8月の終わりまで頑張ってもらったし、また、第13連隊と第306施設隊も6月の後半ぐらいまで頑張ってもらいました。そうして、それぞれ被災された方たちがどんな気持ちで見ているか、自分が被災者になったつもりで自衛隊の活動を陰ながら見させていただきました。そうすると、それぞれの方々が、日本人だから面と向かって「ありがとう」とはなかなか言えないのですが、災害派遣活動を終了して帰る隊員たちに対して、これらの活動を見守った方々が、自分の息子たちやお孫さんたちが去って行くみたいなきもちで、後ろからそれぞれの隊員に感謝の気持ちで手を合わせておられる方も多くいらっしゃったと思います。そんな様子を目の当たりにし、隊員たちは本当に素晴らしい活動をしてくれたと思います。同時に、日頃、訓練とか災害派遣のこととか国防のことなど、なかなか表に出にくいところもあり、自衛隊があつて良かったという活動を隊員たちはしてくれたという意味を込めて、隊員たちに感謝したいと思い、本日はお邪魔させていただきました。

私事になりますが、私の祖母が福島の人でございます。親戚も多くあります。第13連隊については、福島は、特に郡山や白河を含めた多くの地域をやっていただきましたので、その1人1人の隊員に感謝をしたいと思っています。

とにかく、今はいろんなことが、国防も含めて山積みでございますが、その中で、延べにして1千万人以上の隊員が派遣されました。陸海空統合任務部隊の指揮官は、東北方面総監の君塚陸将です。君塚さんも、現地に行かれた方は分かると思いますが、本当ににくたくたで、それでも自然体で指揮を執られた。今は陸幕長になっていらっしゃいます。

ともかく、私が一番思ったことは、被災された方々も頑張っておられた。ただ、派遣現場で任務を続行している隊員たちも、ご親族、例えばお子さんを失ったり、父親や母親を失ったり、自分の連れ合いを失ったりした中で、全てをなげうって任務に勤しんで

いた姿、崇高だと思いました。私は、一言で任務ってという言い方をしてしまいましたが、そうじゃない。何か、自衛隊の皆さんの崇高さ、そして、いろんな厳しい訓練をいろいろくぐり抜けてきた結果がそういう形になったと思って、改めて感謝を申し上げたいと思っています。

また、去年は、自衛隊の応援団が逆にたくさんいました。マスコミの話題にもなりましたが、12月に歌手の長渕剛さんに市ヶ谷まで来ていただいて、防衛省から感謝状を贈りました。長渕さんは現地に行った仲間の激励に来てくれまして、本当に温かいなと思うと同時に、日本が「絆」で結ばれているという思いを強く感じました。

今回の災害派遣活動では、自衛隊が全体の約7割近くを救援しましたし、ご遺体の収容も自衛隊が6割以上も関わっているということを含めると、本当に多くの人の協力があつてですけれども、またその中で新しい「絆」ができて、日本という国の自衛隊の規範と崇高さが、ある意味いやな事件でしたが、国民に良く分かってもらえた機会だったと思っています。

先日、「トモダチ作戦」を指揮した米国の太平洋軍司令官に天皇陛下からの叙勲をお渡しすることとなり、国会の委員会出席のためにお渡しできない大臣に代わり、私が伝達させていただきました。陛下の「明仁」という直筆の入った勲記を司令官にお贈りしました。その時のお話でもありましたが、やはり、日本が本気になれば海外も本気に応援するという感じがしました。

太平洋軍司令官というのは部下が32万人以上いまして、太平洋陸軍・海兵隊・艦隊・空軍の環太平洋の司令官、米軍の司令官でございます。彼が言っていたのは、そういう本気度と同時に、多くの小学校を回ってくれたことでした。

14時46分に発災してから実際に津波が来たのは3時半過ぎです。3時半過ぎだということは、お父さんお母さんはいろんなところで、子どもたちは学校にいる時間です。その時、津波が海辺を襲った。つまり、親が亡くなって残されたお子さんがすごく多いんです。そんな情報が入って、司令官だけじゃなくて、司令官の奥さんまでこちらに来ていただいて、現場に来られて、そして多くの小学校を回っていただきました。

これは、前提は、日本が、日本の仲間たちが、そして自衛隊のその後ろ姿を見て、これは本気だということで向こうの気持ちが動いて、そして「トモダチ作戦」にもつながったと思いますし、そういう言葉を、司令官からもいただいています。これは改めて、皆さんにご報告したいと思っています。

いずれにしても、今日は、防衛省を代表して感謝を申し上げたいと同時に、被災地の仲間の声も代わりにご報告したい、また、個人的にも、親戚がおります現地の仲間として、どうしてもお礼を申し上げたかったということでまいりました。

手短で本当に恐縮でございますが、この後、現地で、政策補佐官で頑張った須藤さん、そして、実際に指揮を執られた横山連隊長の方からしっかりとご報告させていただきたいと思います。是非、皆様には、こういう話を、皆様の勇気でもって、地元で仲間たちに広げていっていただきたいと思います。

最後に、自衛官の募集も大変な時期にきておりますので、自衛隊が頑張っていることを伝えていただきたいと切にお願いしたいと思います。今日は皆さん、そういう意味でまいりました。今日はご苦労様です。ありがとうございました。

(館内拍手)

【司会】

ありがとうございました。

皆様、引き続き講演の準備をいたしますので、しばらくお待ち下さい。

お待たせいたしました。

それでは、東北方面総監部・須藤 彰政策補佐官より、東日本大震災における自衛隊の活動・任務について、ご講演をいただきます。

それでは、須藤政策補佐官、よろしく申し上げます。

【第1部 須藤彰東北方面総監部政策補佐官】

皆様、こんばんは。

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

私は平成10年に防衛省に入っております。この格好(迷彩服)をしておりますが、私は役人です。防衛省のことに詳しい方は、防衛省の中には制服組と背広組の2つがあるとか、また、この両者は仲が悪いのではないかなどと、お聞きになったことがあると思いますが、その分類でいきますと、私は背広組ということになります。ただ、この格好をして、「背広組の須藤です。」と言っても、ご冗談でしょうというふうに言われてしまいます。震災以来、ずっとこの格好でおりますので、形の上でも分類が難しくなっていますし、気持ちの上でも、自分は事務官であるとか自衛官であるとか、そういうことを考えずに、仕事しております。

私は、政策補佐官というポストに就いており、平素は自治体など関係機関との連絡調整を行っています。今回の震災では、米軍や関係自治体、関係省庁などを相手に、仙台に置かれた司令部で勤務しながら、調整にあたっております。

また、今回の震災では、後ほど紹介しますが、統合任務部隊というものができました。統合任務部隊は、10万人という非常に大きい態勢で動いておりましたので、指揮官の所にすぐには情報が入ってこない。暫く時間が経過すると、部隊の方から、正確なしっかりした情報が入ってきますが、やはりすぐには情報が入ってきません。そこで普段の仕事に加えて、指揮官にタイムリーな情報を提供するために、ほぼ毎日被災地を回りまして、部隊がどういう活動をしているのか、被災者の皆さんがどのような苦しい思いをされているのか、そういう現場の実情を確認した上で、「この点はこういうふうにした方が良くないでしょうか」とか、「この問題では、部隊はこういうふうに動いた方が良くないと思います」というような助言をしております。

それでは、これから資料を使いまして、説明していきます。

今回ですが、繰り返しになりますが、10万人体制ということで、ちょうど画面の表のように、防衛大臣の下にJTF東北、これはジョイントタスクフォース(Joint Task Force)東北、つまり統合任務部隊が組織されました。ご存知のように、自衛隊は、普段は陸、海、空と分かれて運用されていますが、今回は1つの統合任務部隊として、一体となって動くことになりました。

その指揮官が、先ほど政務官からも紹介がありましたけれども、当時の東北方面総監、

今は陸幕長になられております君塚陸将です。10万人の指揮官ということで、陸、海、空、それぞれの部隊を指揮しておりました。

私がおりましたのは、この司令部の中です。先ほども説明したように、ここで指揮官に、現場で確認した情報を提供したり、助言をしたりしていました。

陸上自衛隊は、一番多い時で大体7万人の数で活動しておりました。海上自衛隊は約1.4万人、航空自衛隊は2.2万人、合計すると、大体10万6千人。この体制で自衛隊は活動しておりました。

あと、これは指揮官の下ではないのですが、今回、米軍が我々自衛隊を支援してくれまして、一番多い時で2.4万人の態勢で、被災者の救援にあたってくれました。

次の資料をお願いします。

今度は、司令部の中ですが、ちょうど赤く塗ってありますこの政策補佐官、これが私になります。他には総務部、人事部、情報部、防衛部、装備部という部があるのですが、これらの中の1つに私の政策補佐官があります。

ほかに、もう1つ赤く塗ってありますが、こちらは法務官です。今日は来ていないのですが、法務官の近藤1佐とペアで現地を回りまして、被災地の状況、部隊が困っていることはないかなどということ、いろいろ聞いて回って、指揮官に報告をしておりました。

それでは、ここからは、ちょうど東北方面総監部の方で、DVDを作りましたので、そちらをご覧になっていただきたいと思います。

(ビデオ上映)

それでは、ここから資料を使いまして説明を続けます。

まず、震災の特性です。今回は、地震よりも津波の被害が非常に大きかったことです。ヘリコプターで上空から下を見ますと、もう海の中に街ができていますかのように。津波で家がずっと流されているからなのですが、あたかも街が海の中にできているかぐらいの大きな被害が出ておりました。

それから、被害が非常に広域で甚大だったこと。岩手、宮城、福島に及ぶ非常に広域な被害がありました。

それから津波と原発。これはもう皆さんご存じだと思いますが、津波だけでなく、原発による被害もありました。自衛隊的に言えば「二正面作戦」ということになります。

更に、地方自治体の中には機能を喪失しているような自治体もありました。報道などで、津波で役場が流されてしまった自治体、町長さんが亡くなられた自治体があり、そういう自治体はうまく仕事ができないのではないかと報道もされていたので、そういうイメージを持たれている方も多いかと思います。しかしながら、これは政策補佐官の仕事になりますが、実際に調整にあたってみると、そういう自治体というのは逆に動きが非常に良いのです。

それでは、どういう自治体が良くないかといいますと、あまり被害が無かった自治体です。つまり、震災の時にも、平素の仕事のやり方をそのままやろうとしてしまうため、かえって仕事がうまく進まない状況になるのです。

例えば、避難所に津波で押し上げられたヘドロがたくさん溜まっている場合、放置しておく衛生上非常に問題となりますので、これを片付けないといけません。自衛隊はバキュームカーを持っていないので、自治体の方になんとか片付けてくれないかをお願いします。そうすると、自治体の中で喧嘩が起こる。これは衛生上の問題だから、衛生部局が対応しないといけません。いやいや、ヘドロは産業廃棄物にあたるので、この担当は環境部局でしょう。そうかと思うと、そのヘドロがあるのは避難所に指定された学校だから、これは教育部局が担当するのが筋だ。何を言っているのですか、これは災害が原因でヘドロが溜まったのだから防災部局の仕事ではないですか、とお互いに主張しあって、話が先に進みません。

それから瓦礫の捨て場ですが、瓦礫置き場は各部ごとに縦割りで決まっているようです。よく瓦礫の捨て場所がない、置き場所がないという報道がありましたが、実際、現地へ行きますと、結構置き場はあるんです。ただ、そこに自衛隊とか他の人が置こうとすると、「いやいや、これは環境部の瓦礫置き場です。他の人は使っちゃいけないのです。」というふうな話になっている。それでは、例えば、道路部の瓦礫置き場はどうかというと、道路上の瓦礫を集める所ですから量も多くて、確かに瓦礫で一杯になっています。片方では瓦礫置き場が余っているものの、片方では一杯になっているというような形で、なかなかうまくいかない状況がありました。

これまでは組織の中の縦割りの話でしたが、自治体職員個々の習性も問題になります。私も同じ役人ですので、これは自分も反省しなければいけないと思いますが、具体的には、救援物資の配分です。震災直後から、被災地には全国各地から多くの救援物資を送っていただきました。これらの救援物資は県から市町村の集積場へと運び込まれて、そこから被災者の元へ配送されることとなります。ところが、その救援物資が避難所になかなか回らないのです。震災直後は物資自体が不足していましたが、その後、自治体の集積場へ救援物資が集まるようになって、避難所になかなか回らないのです。

当初は携帯電話も繋がらず、なかなか情報が入って来ませんので、自衛隊の方でも人を出して、どの避難所には何人くらいいるかということを知るのですが、なかなか正確な情報は入ってきません。実際、当初の段階では、どんどん避難される方もおりますし、逆に、自分の家がどうなったか確認されるために避難所を出ていく方などもおられて、なかなか正確な数字が分からない。「だいたい」しかわからないわけです。それでも、100人くらいじゃないでしょうかとか、200人くらいじゃないでしょうかという形で自衛隊が報告をして、「だいたい100人くらいですので、食事だったら300食くらいを持って行きます。」と自治体の方に掛け合うわけです。ところが、自治体の方は「いやいや、だいたい100人くらいでは困ります。98人なのか、102人なのか、そこをはっきりしてくれないと困ります。」と言われてしまいます。自治体としては、いただいた救援物資が余ったり、あるいは足りない、というようなことがあったら申し訳が立たないというのです。先ほども申しましたように、救援物資の宛先は市町村になりますから、自衛隊の一存では勝手に配れません。配りたくても配れなくなってしまいます。「非常時に、律儀にそんなことを言っていたら、話が先に進みません。助かる命も助かりませんよ」と説得しても聞く耳をもちません。我々の感覚では、足りなかつたらもう1回届ければよいし、余れば次の機会に食べてということでもいいじゃないかと思う

のですが、普段、特に役所で予算の作業をやっていると、これは税金ですから、1円たりとも無駄に使ってはいけない、しっかりミスなく執行していかないといけない、とにかく間違っちゃいけない、という習性があるものですから、その発想で救援物資も配ろうとして、結果的に、上手く物事が進まないわけです。とにかく早く配らないといけないのに、なかなか配れないし、配らせてもらえないということで、残念なことに、食べ物などはそのまま倉庫の中で腐ってしまったこともありました。

次に、本対処の特徴ですが、ちょっと力んだ表現ですが、自衛隊が「最後の砦」だという思いで取り組んでいました。

例えば、市町村であれば、上手く対応できない、もう駄目だと思えば、県の方へなんとかしてくださいと協力をお願いすることができる。県の場合も、これは駄目だと思えば、国に協力をお願いすることができるわけです。また、国の各機関もどうしても困ったときには自衛隊をお願いすることができます。ところが、自衛隊は他にお願いするところがありません。我々ができないということは、日本として、国として対応できないということになってしまいます。したがって、とにかく我々が「最後の砦」だという強い思いを持って、被災者のために、自衛隊の存在意義をかけて、災害に臨みました。

次の資料をお願いします。今度は実績です。

人命救助ですが、3月11日から26日までの間、ピークは13日になりますが、合計で1万9千3百人の方を救助しております。

ご遺体の収容になりますが、これは9千5百5人を収容しております。ご遺体全体では、だいたい6割を自衛隊の方で収容しております。

医療支援では、自衛隊の医官が被災地へまいりまして、診察をしております。風邪や持病の高血圧、ちょうど3月、4月頃でしたので、花粉症などの治療をしております。

ここでグラフをご覧ください。後でもう1回説明いたしますが、人命救助のピークは13日です。それで、ご遺体の収容もやはり初期の頃が一番多いです。医療支援になりますと、ちょっと時間が経って、暫くしてからピークを迎えるという形になっております。

次の資料をお願いします。引き続き数字ですが、生活支援の実績です。

給水支援ということで、合計3万3千トンの水を被災者の方に提供しております。それから、給食支援では、数が非常に多くなりますが、5百万5千食を被災者の方に提供しております。入浴につきましては、109万人に対して支援をしております。

グラフをご覧ください。震災の当初は、給水支援はそんなに多くないですが、だいたい10日くらいしてからピークを迎える形となっています。給食支援も同じく、だいたい10日くらいしてからピークを迎えています。入浴支援も同じです。やはり最初は少なくて、だんだん数が増えてピークを迎えます。

これはいったいなぜかと申しますと、もちろん支援の準備に相応の時間が必要というのもあるのですが、それ以上に、災害時の部隊運用の基本として、やはり初動では人命救助に集中する必要があるからです。よく人命救助は最初の72時間が大切と言われるのですが、これらの数字をご覧になるとよくお分かりになると思います。

報道などで、避難所によっては1日1個しかおにぎりがなくて、本当にひどい、大変だ、自衛隊はいったい何をやっているのか、等々の話がありましたが、我々もそうい

う状況は把握していました。避難所に物が無いことは充分知っています。ただ、どちらを優先するかといえば、これはやはり人命救助の方になるわけです。お腹が減っている、確かにご不満があるのは分かる。しかしながら、現に、文句さえ言えず、不満さえも言えずに、瓦礫の下で声も上げられずにいる方がいることを考えますと、非常に苦しい決断ではありましたが、やはり人命救助を優先せざるを得ません。最初は人命救助にあたり、その後、だいたい1週間くらいしてから生活支援の方に主力を投入するという形で部隊を運用しておりました。

次の資料をお願いします。写真になります。

行方不明者の搜索状況です。当初は道路もその脇も瓦礫で埋もれてしまっていました。最終的にはこういう形で瓦礫を全て片付けております。

我々の任務は、あくまで行方不明者の搜索で、特に瓦礫を片付けることが目的ではありません。ただ、行方不明者の搜索活動では、そこに誰もいないことを確認しながら、1箇所、2箇所と瓦礫を片隅に寄せていくのですが、そうしますと、お子さんなどの行方が分からないご家族の方は、ひょっとしたらあの下にいるんじゃないか、自分の子供とかがいるんじゃないかなどと、どうしても気になってしまうのです。我々は全部確認した上で、瓦礫を片隅に寄せているのですが、ご家族の方は気になられて夜も寝られない、気持ちがどうしても納得できないわけです。したがって、司令部としては、各部隊に搜索活動を命じるだけで、瓦礫についてはどこまで片付けなさいということは指示していないのですが、現場にいますと、そのようなご家族の強い気持ちが痛いほどよく分かりますので、そこは活動にあたる各部隊の判断で、「行方不明者の搜索」の内容を広く考えて、なるべく瓦礫を残さないように搜索をしていました。

これは、報道でも度々取り上げられています大川小学校です。児童108人のうち、7割の児童が亡くなられ、あるいは行方不明になられました。このように、最初、学校の中は瓦礫で埋もれています。押し波で学校の物が全て流されて、引き波で色々な物が入って来ています。タイヤとかウィスキーの瓶などの瓦礫で一杯でした。学校の中は機械を使って片付けるというわけにはいきませんので、全て手作業で瓦礫を取り出し、最終的には何も無い状態にしております。やはりこちらも、親御さんが、瓦礫が少しでも残っていると、頭ではそこに自分の子供はいないと分かるものの、気持ちがどうしても落ち着かなくなってしまうということで、このように瓦礫も片付けております。

次の資料をお願いします。

こちらは、原発の20キロ圏内での行方不明者の搜索活動になります。

側溝の中に潜り込んで何をしているのだろうと思う方もいらっしゃると思いますが、小さいお子さんがこういうところに流されているということもありますので、このようにあらゆる隙間に潜り込みまして、隅々まで漏れなく搜索をしております。

また、原発の20キロ圏内が他とは違うところは、被災者の方はこの中に入れないということです。他の場所ですと、津波が来た場所であっても、自分の家がどのようになっているか、自分の目で確認することができるわけです。ところが、原発の20キロ圏内になりますと、自衛隊しか入れません。皆さん自分の家がどうなっているか大変心配をされていました。したがって、この地域を担当した部隊では、皆さんのお気持ちを十分に汲んで、他の場所と同じように瓦礫を片付けながら徹底的に搜索を行うとともに、

家の状況が分かるように写真を撮って、あなたのお家はこのようになっていましたと説明するようにしていました。確かに被害を受けていますので、綺麗で元通りというわけにはいかないのですが、写真を渡しながら報告しますと、被害者の方は、自分の家の状況を確認することができてよかったとおしゃってくれたそうです。

次の資料をお願いします。

こちらは、生活支援の一環で、現地のニーズの聞き取りです。我々は御用聞きと言っておりましたが、被災者の方に声を掛けて、とにかく困っていることはないか、いろいろお話を聞いていきます。最初は食べ物、水、毛布とニーズはシンプルです。しかし、段々時間が経って来ますと、同じ食べ物を食べていると、どうしても飽きてきますし、栄養状態も良くありませんので、野菜が食べたいとか、暖かいものが食べたいとニーズが多様化してきます。衣類でも、単に寒さを凌げばいいというレベルから、もう少しお洒落な服を着たいというニーズも出てきます。更に時間が経ちますと、自分の将来のこと、仕事は続けられるのか、自分の家をもう1回建て直して同じ場所に住むことができるだろうか、そのような点も気になってきます。また、避難所生活も長くなりますから、いろんなご不満や悩み。例えば、誰々さんの軒がうるさいというのもあります。もちろん自衛隊として、相談を受けても、解決できないこともたくさんありますが、皆さんからお話を聞きまして、我々でできることは対応するようにしました。仮に解決できない問題でも、少なくとも誰かに話をすることですっきりしたという方も結構いらっしゃいましたので、我々としては、とにかく皆さんのお話をしっかり聞くということを心懸けて活動しておりました。

あと、この写真のように、女性の被災者には女性隊員が対応していますが、今回の活動を通じまして、男性隊員よりも女性隊員の方が上手に対応できる仕事があるなと感じたところですが、こういう御用聞きなどもまさにそうだと思います。例えば、化粧品がほしいと言われても、我々男性ではよく分かりません。また、いろんな人生相談にしても、いかつい男性の隊員が相手ではなかなか話しにくいと思います。やはり女性の隊員の方が話をしやすいのでしょうね。女性ならではの仕事、むしろ、女性の方が男性よりもうまくできる仕事が、今回の震災では実際にあったと考えています。

次の資料をお願いします。同じく生活支援です。

これは入浴支援です。こういう形でテントを張り、その中に浴槽を用意して、皆さんにお風呂に入っていただきます。被災者の方からお話をお聞きすると、普段と同じ事をした時に、普段と違う場合、例えば、普段毎日入っていた風呂が、あまりにもみずぼらしいとか、あまりにも不便だということになると、非常に惨めな気持ちになられるとのことでした。そこで、各部隊でそれぞれ考えまして、単にお風呂に入っていただくだけでなく、例えば、社交の場を設けて、お風呂上がりに皆さんでお話をしていただいたり、お化粧する場所を用意したり、創意工夫をしています。

次の資料をお願いします。こちらは米軍の活動になります。

先ほどのDVDにも出ていましたが、仙台空港です。当初、仙台空港も瓦礫の山でした。仙台空港が使えないと、山形空港や花巻空港など、救援物資を迂回して送らないといけません。仙台の地域に運ぶことができないので、米軍にいち早く片付けをしてもらって、物を運べるような態勢にしました。その他、学校の復旧などいろいろやってもら

いました。

今反省しているのは、もっと早く、米軍にいろいろとお願いをしておけばよかったということです。実は当初、米軍がどういった事してくれるのか、よく分かりませんでした。どういった機材を持っているかよく分からないし、それ以上に、米軍がどういう気持ちで日本に来てくれているのかが分かりませんでした。写真にありますような学校の清掃は、地域にとっては非常に重要な作業ですが、要は手作業ですので、人数さえそろえば片付けられます。野球でも、4番バッターにバントをさせていいのかどうかというふうな話と同じで、米軍じゃなくても、自衛隊じゃなくても、人数がそろえば誰でも片付けられる作業を米軍にお願いしていいのかなと悩んでいました。

そこで、最初に仙台空港の復旧をお願いしたわけです。ここは被災地に物資を輸送する際の要となりますし、復旧には多くの重機とマンパワーも必要になります。これは米軍にふさわしい仕事だろう考えました。

そのうち、米軍と毎日話をしていると、彼らからヒシヒシと熱いものを感じるわけです。俺達とはとにかく日本を助けるために来たのだから、どんな仕事でも、どんな事でもいいからやると言ってくれました。初の表でも説明しましたが、我々は統合任務部隊、ジョイントタスクフォース (Joint Task Force) なのですが、米軍は統合支援部隊、ジョイントサポートフォース (Joint Support Force) なんです。「名は体を表す」を地でいっているわけです。そして、そのサポートは何かといえば、それは自衛隊を助けること、自衛隊を支えることだから、とにかく自衛隊がやっていてどうしても手が回らないこと、困っていること、そういうようなことは何でもやるからと言ってくれました。お互いに強い信頼関係ができてからは、もう遠慮なく、学校の復旧などいろいろお願いしました。

報道ではなかなか出てこないのですが、ちょうど3月の終わり頃で、学校が新年度を迎える時期です。学校もこのまま再開できるかと悩んでいる時でしたが、米軍が速やかに片付けてくれたお陰で、だいたいの学校が4月中には新学期を始めることができ、地元では大変好意を持って、米軍の活動を評価していただきました。

また、写真のように救援物資の輸送も米軍にお願いしました。この関係で、1つ困った事がありました。「この物資を、どこその場所に、何時に運んで下さい。」とお願いをするのですが、毎回、必ず時間と場所を間違えるのです。最初は、自分の英語が下手なのかと思っていろいろ反省したのですが、紙に書いてメモを渡してお願いしても、それでも間違える。「いったい米軍はどうなっているんだ」と、米軍の担当に文句を言ったことがあります。そうしたら、「ミスター須藤、おまえは分かっていない。まだ青い」と。「自分たちはいろいろな国に行って、数多くの生活支援をやっている」。最近ですと、インドネシアのアチェというところです。それで「よく考えてみる。決められた時間と場所に物を置くと誰が勝つんだ。若い男に決まっているじゃないか。だから俺たちはわざわざ時間と場所を外している。そうすれば、予定の地点で待っている若い男を出し抜いて、女性や子どもにだって、物をもらえるチャンスが生まれるじゃないか。」と言うわけです。なるほど、そういう考え方をするのか、と感心しました。ただ、皆さんもよくご存知のように、日本人はそういうことはしません。そういう人たちじゃないのです。ただ、それを言葉で説明するとなかなか難しい。そこで、ちょうど、私のいる

仙台の東北方面総監部の前にある小学校も避難所になっていましたから、百聞は一見にしかずと考えて、とにかく来てほしいと米軍の担当をそこへ連れて行きました。タイミングがいいことに、ちょうど食べ物を配っているところで、皆さん一列にしっかり並んでいます。若い男の人も、お年寄りも子どももです。誰も割り込まず、ましてや力づくで奪ったりなんかするわけもない。その日は特別に子どもにだけ、「おまけ」でチョコレートあげることになっていて、子どもたちがチョコレートをもらって喜んで食べている。その光景を見まして、米軍の担当も「信じられない。これはもうタイタニックの世界だな」と、非常に感心してくれました。こんなことは、日本にいれば、当たり前前の光景ですが、そのときは私も同じ日本人として本当に嬉しかったです。米軍もよく日本人のことを理解したようで、それ以降はこちらがお願いすると、ちゃんと決められた時間、決められた場所にしっかり物を届けてくれるようになりました。

私は、困った時とか辛い時、こういう時に人間の真価というか、その人の価値みたいなものが出てくるのだと思います。米軍は、我々が困った時に、とにかく何でもやる、どんな作業でもやるからと言ってくれました。俗な言い方ですが、本当にいい奴だなと思いました。また、逆に米軍の方も、こういう時でも、日本人は取り乱すことなく、このように秩序だって行動しているということを知ってくれたと思います。「いろいろな国を支援してきたけれども、日本ほどレベルの高い国はない」と非常に感心してくれました。私も日本人として非常に鼻が高かったです。

次の資料をお願いします。こちらは戦力回復、後はメンタルヘルスです。

我々の活動も長くなりました。自衛隊も厳しい訓練を積んでいるとはいえ、やはり気合いだけでは乗り切ることではできませんので、隊員を休養させることにしました。

そこで、この写真のように、山形にある駐屯地など、活動地域から離れた場所に、隊員がゆっくりできるスペースを設けて、例えば、1週間活動したら、1日か2日、こういう場所で、ベッドの上でゆっくり寝かせる。お風呂にも入らせるし、温かいご飯も食べさせる。「戦力回復」という言葉を使いますが、そのように対応しておりました。生活も落ち着いた今、改めてこの写真を見ますと、体育館にベッドが並んでいるだけで、あまりゆっくりできないような感じがするのですが、屋根もあるし、床もあるところにベッドを置いて、ゆっくり寝られる、あの当時はそれだけでも幸せでした。

それから、メンタルヘルスです。やはり、活動中に、ご遺体を扱うことが多かったものですから、どうしても気持ちが塞いだり、元気がなくなってしまう隊員もいました。そこで、カウンセラーなどの巡回指導チームが部隊をまわってアドバイスをしたり、各駐屯地にはだいたい1人、臨床心理士がいるのですが、その人たちからアドバイスをもらったり、少しでも心が平静を保てるように対応しておりました。

このメンタルヘルスですが、新聞などでは、ご遺体を扱うことが多かったから、隊員は気持ちが塞いでしまう、元気がなくなってしまう、つまり、ご遺体を扱っていることが原因だと理解されていますが、人間の心というのは非常に複雑で、必ずしもそれだけが原因ではありません。実際には逆の場合もあります。例えば、隊員によっては、ご遺体が見つからないからということで、元気をなくしてしまうのです。ご遺体があるからではなくて、ご遺体が見つからない、要するに、ご家族の期待に応えられない。だから自分は駄目だというふうに思って、元気をなくしてしまう隊員もやっぱりいるのです。

それから、これは私自身がそうですが、司令部勤務者とか、部隊でも連隊長というクラスの方というのは、もう少し自分はいろんな事ができたのではないか、あの時もっとこういうことをすれば良かったのではないかと考えてしまうのです。これは活動中に限らず、活動が終わった後でも、今でもふとそう思うときがあります。

災害の当初というのは、とにかく全てが足りません。隊員の数も足りないし、車両もない。救援物資もありません。本当だったら、被災者のために、いろんな事を全部してあげたいけれども、それができない。人命救助をするといえば、生活支援は後回しになってしまう。逆に、生活支援をやるといえば、ご遺体の収容が遅れてしまいます。要するに、何かをすると何かを失う。必ずみんなを満足させることはできないのです。私自身も、あの時、自分はこういうふうに判断したけれども、本当にこれで良かったのかと思うときがあります。当時は情報もなかったし資源もなかった。その中で、自分なりに精一杯の判断をし、当時の君塚指揮官に「指揮官、こういうことだと思います。いかがでしょうか」、「こうするといいと思います」と指導を仰いでいました。でも、今になって考えると、もうちょっとしっかり情報が取れたのではないか、もうちょっといろんなことができたのではないかなと、やはり考えてしまいます。

それからもう1つ、現場では、どうしてもご家族の方に感情移入してしまいます。臨床心理士の先生からは、「現場では感情移入してはいけません。特に、ご家族には感情移入してはいけません。気持ちが持たなくなりますよ」といわれているのですが、いざ現場に出ると、それが本当に難しい。

私も被災地で体験しましたが、ご遺体を発見した時に、周りで捜索状況を見守っておられたご家族の方がどういう表情をなされているかということ、最初はほっとした表情をなさいます。それまで行方不明だったわけですが、それがやっと見つかったということで、ほっとした表情をされます。ただ、同時にがっかりした表情もされるのです。それまでは、助かってはいないだろうと思いつつも、でも、もしかしたら、ほんのわずかな確率でも、どこかで生きていてくれるかもしれない、また、そうあってほしいと思っていたのだと思います。しかし、ご遺体になって見つかったということで、やっぱり亡くなっていたのかと落胆されるわけです。そのほっとした気持ちとがっかりした気持ちの両方が表情に出てくるのです。そういうことを考えながら、ご家族の表情を見ていると、こちらも非常に胸が締め付けられるような気持ちになります。隊員はどうかと思って周りを見ると、水につかりながら作業をしているのですが、やはり同じように涙を流しながら作業をしています。感情移入してはいけないというのですが、現場にいますと、そう簡単ではありません。

ただ1つ言えるのは、感情移入してしまうことは、決して失敗ではないということです。今回、各種の世論調査を見ますと、自衛隊は被災者のためによくがんばってくれたと、国民から高く評価していただいているようです。その評価の中には、例えば、人形やぬいぐるみまで、自衛隊がちゃんと大事に扱ってくれた、という意外な思いも含まれているようです。今回の震災では、自衛隊の仕事は人命救助や行方不明者の捜索です。特に人形やぬいぐるみを探すことまで想定されているわけではありません。しかしながら、ご家族の気持ちになってみた時に、「ひょっとして、このお母さんのお子さんは亡くなっているかもしれない。津波で周囲のものは全て流されてしまっている。そうする

と、今見つけたこの人形が、このお母さんにとっては唯一の形見になるかもしれない」そう思うと、冷たい水であっても、一生懸命に洗って、きれいにして渡してあげようと考えerわけです。

現場にいと、どうしても感情移入してしまう。感情移入してしまうから、臨床心理士の先生が言うように気持ちが痛んでしまいます。しかし、同時に、各隊員がご家族に感情移入するから、ご家族と同じ気持ちで現場にいるから、そのご家族の気持ちに寄り添って、ご家族のためにできることは何でもしようとして柔軟に対応できたのだと思います。

私自身も子供が2人います。先ほど、写真がありました大川小学校で行方不明者の捜索をしているときに、あるお父さんから声をかけられました。娘さんがちょうど中学校に入る時で、「制服も作ったのに、娘に着せてあげられなかった。自衛隊には本当に迷惑かけて申し訳ないが、遺体があればこの制服を着せてあげられるから、とにかく早く娘の遺体を見つけてほしい。」とお願いされました。私の娘もちょうど中学校に入る時でしたので、お父さんの気持ちが痛いほどよく分かりました。これを仕事だからと割り切ることはとてもできませんでした。今、こうやって思い出しても、目がうるうるしてしまいます。

したがって、活動は終わりましたが、気持ちの面では、むしろ活動中よりも気持ちを病んでしまったり、元気がなくなってしまう。こういう隊員が出てきていますので、活動中だけでなく、今後も引き続き、常に、隊員の気持ちに変化はないかということをチェックして、少しでも隊員が元気でいられるように配慮したいと考えています。

次の資料をお願いします。最後になります。今回、こういう形でいっぱい感謝のお手紙をいただきました。大川小学校の児童からもお手紙をいただきました。

私も現場に毎日出ていましたが、その理由の1つは、隊員が困っていることはないか、何か足りないものはないかを聞くためです。そして、そういうものがあればいち早く手当をする。そのために現場に行っていたのですが、東北の隊員は、とても我慢強いです。何か困っていることはないですか、足りないものはないですかと聞いても、いや大丈夫です、満足ですと言うのです。当初は、ゴム長の調達に間に合わず、隊員は迷彩服で水の中に浸かって捜索していますので、冷たくて仕方がないと思うのです。それでも、いや大丈夫ですと答えます。これほど我慢強く、表情ひとつ変えずに作業していた隊員たちですが、それが、いただいた感謝の手紙を見て、おいおい涙を流して泣き出すのです。本当に喜んでこういう手紙を見ておりました。

隊員たちは、普段も一生懸命に訓練をしています。山の中の演習場などで訓練していますので、一般の方に見ていただく機会はなかなかありません。今回は、大変過酷な活動ではありましたが、皆さんから、このようにお手紙もいただき、非常に励みになったと思います。

10万人の隊員をここに連れてくるわけにはいきませんので、今日、私は、この隊員たちの代表という気持ちでこちらへまいりました。隊員たちは、こうやって皆様に手紙をいただいたり、また、被災地で手を振っていただいたり、敬礼していただいたりなど、非常に親切にいただきました。本当につらい活動だったのですが、その中で、皆様からの激励が、本当に我々の励みになったと今思っております。今日は、隊員みんながお礼を言うことができませんので、私、最後に、隊員に代わりまして、お礼を言わせて

いただきまして、講演を終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】

須藤政策補佐官ありがとうございました。須藤政策補佐官に対するご質問につきましては、第2部の講演の後、質疑応答の時間を設け併せてお受けいたしますのでよろしくお願い致します。皆様今一度盛大な拍手をお願いいたします。

(館内拍手)

ありがとうございました。

皆様、引き続きまして第2部の講演の準備をいたしますのでしばらくお待ち下さい。

お待たせいたしました。それでは、陸上自衛隊第12旅団第13普通科連隊長・横山義明1等陸佐より、「東日本大震災の被災地における自衛隊の活動について」ご講演をいただきます。

横山1等陸佐、よろしくお願い致します。

【第2部 横山義明陸自第12旅団第13普通科連隊長】

皆様、こんばんは。第13普通科連隊長兼ねて松本駐屯地司令の横山でございます。私は、この松本の地で部隊を指揮させていただいているわけですが、東日本大震災の災害派遣活動を実施しまして、非常に多くの教訓事項がありました。そして、松本に帰ってきましたから、6月23日には上高地の国道158号線の土砂災害、そして6月30日の松本の震度5強の地震といったこともありまして、非常に、昨年は災害と密接な年だったと感じております。今回、私どもは福島で活動してきたのですが、なかなか報道ベースに乗らないようなエリア、そして、先ほどありましたように土砂災害といったエリアとかも捜索しておりますので、できるだけ教訓というより現場の実状をお伝えしたいということで、長野県内の自治体の市長さんとかをお回りして、普及をしておるところでもあります。そのような中にありまして、今回このような講演の機会をいただいたということで、本当に光栄に思っておる次第でございます。先ほど、須藤政策補佐官の方から、陸上自衛隊の方面総監部、いわゆる上級部隊としての視点からご講演いただきましたので、私はどちらかという現場の視点、現地の市町村、特に、現地対策本部では市長さん等が指揮を執っておられましたが、それらの部分での自治体との連携、さらには警察や消防との連携といった視点で、具体的にお話をしてみたいと思っております。

それでは、総括資料もありますので、重複をいとわず、まずは総括的なところをご説明申し上げて、あとは現場の細かいお話をしてみたいと思っております。

(次のスライド)資料をお願いします。

これは震災1か月後です。現地で全隊員が黙祷を捧げているシーンでございます。当然、ご遺体をあげた時にもこういう黙祷を捧げるようにしております。また、追悼式等も、現地の市町村からご案内をいただいているところがございます、特に、来月につ

いては、現地の2つの市町村から、今、追悼式参加の案内をいただいているところですが、本当に、あっという間に1年が経ったなという思いがしております。

(次のスライド) 当時、私は部隊を指揮するにあたって、中隊長等にずっと言っていたことは「1日も早く、1人でも多く」という視点です。特に、私どもの部隊は、これからご紹介しますとおり、いろいろな災害派遣活動任務にあたりましたが、最終的には行方不明者の捜索が重点的な任務となったことから、このような観点を常時、隊員に自覚させていたところです。

それでは、1項目の特性や被害状況について、福島県での第13連隊の活動を視点に、ざっくりとご説明申し上げます。まずは特性です。皆さんご承知のとおり、マグニチュード9.0の地震、そして震度6強、津波、そして原発の災害でございます。特に福島原発は、第一原発と第二原発を合わせて10基ありますが、そのうち、第一原発の4基が、それぞれ12日以降、水素爆発を初め、このような状況になっているということで、私どもは、現地でこの爆発をテレビを見て、そして近傍に行っていた部隊から情報を得たというところであります。

(次のスライド) これは、東北地方全体の地図でございます。総括させていただきませんが、死者、行方不明者合わせて約2万人弱、避難者は約34万人でございます。実は、私も出身が福島でございますが、年末に帰りましたが、年末の報道では、福島はこの原発災害でございますから、県外避難者が約6万人いるそうです。やはり、復興とはほど遠いのが福島かなと思っています。

(次のスライド) そして、災害派遣活動ですが、東日本全体でそれぞれの期間やっていたということです。東北方面隊の中でも、岩手県は7月26日まで、宮城県は8月1日までの間災害派遣を実施しました。福島については、12月20日に県知事からの撤収要請がきまして、26日をもって撤収したというところであります。

(次のスライド) それでは、自衛隊の対応について申し述べます。先ほども説明がございましたが、10万人態勢の中で、大規模災害派遣と原子力災害派遣との2本立てで活動をしたというところであります。東北地方の、特に岩手、宮城、福島の3県の激甚地域には、全国の部隊を集めたというところであります。福島県には2個の駐屯部隊があります。長野県には、私ども第13連隊が基幹となる松本駐屯部隊しかありませんが、福島県には、大きくは2つの駐屯地と航空自衛隊の基地があります。しかしながら、陸上自衛隊の2部隊は宮城の方に集中派遣されたということで、福島エリアには、群馬に司令部がある第12旅団が派遣され、私ども第13連隊も福島に入ったというところであります。そして、また、中央即応集団という部隊が、特に、原発近傍の対応を行いました。

(次のスライド) 累計的な数字です。防衛省で出している数字でございますが、大規模災害派遣は延べ1,000万人、原子力災害派遣については約8万人でありまして、私どもの部隊も、この一部を担任させていただいたというところであり、行方不明者の捜索、人命救助、物資輸送、給水支援、給食支援等の活動を実施いたしました。

第13連隊でございますが、私以下の主力が出発したのが12日です。主力部隊の出発は12日0時を回ってしまいましたが、情報部隊は11日の夜22時前後に出発しています。当時は、まだ上信越道から北関東道が繋がっていませんでしたので、新潟まで

行かざるを得ませんでした。

(次のスライド)そして、第13連隊の活動ですが、福島県全体の中で、まずは郡山、福島の真ん中の都市です。この郡山以南のエリアを任せられて、特に、白河市の土砂崩れ、そして須賀川市のダム決壊現場の対応にあたりました。これらは、ほとんど報道ベースに載らなかったですが、災害自体は、非常に大変な災害だったところであります。そして、このエリアでは、郡山市などで給水支援と給食支援をやりました。その後、最終的には南相馬市に焦点が移っていくこととなります。

私どもの部隊の活動期間です。実は、私ども主力部隊は6月8日にこちら帰ってききましたが、一部LO(連絡要員)として現地に残してきたため最終的に帰ってきたのが6月24日でありますので、だいたい3か月間派遣されていたと思ってください。

(次のスライド)先ほど、下条防衛大臣政務官の方からお話がありましたように、松本の部隊には重機を持っている第306施設隊という部隊があります。この部隊は、宮城県の石巻の方に4月14日から6月23日までの間行っていました。いわゆる指揮命令系統が異なりますので、災害派遣活動の場所が異なったということです。本日は、この説明は割愛します。

それでは、私どもの細部の活動を簡単にご説明させていただきます。

1つは、先ほどから言いますように白河市での土砂崩れ、それから、須賀川市でのダムの決壊というところをご説明します。

(次のスライド)これは、白河市での土砂災害の救出の写真でございます。右側に山がございまして、後ほど映像を見ていただきますが、これが土砂崩れを起こしまして災害に及びました。十数軒の全家屋が、土砂に埋まったり倒壊したりして、全部壊されたということです。先ほどの説明にもありましたとおり、このような倒壊家屋での人命の生存率は、だいたい72時間、いわゆる3日が1つの限度とされておりまして、阪神淡路大震災でも4日目以降では相当に生存率が下がったというデータを確認しております。したがって、「初動が大事」というところから、部隊自体も戦力を集中して搜索したところでございます。

これは、倒壊家屋の中で、私どもの装備品であるスコープをのぞいて、中に人がいないかどうかを確認している写真です。いろいろ手を尽くして搜索をするのですが、非常に大規模な土砂崩れになりますと、どこに埋まっているのかという情報が本当に大事であるにも関わらず、中々それが得られないということから、災害救助犬の活用が非常に大切でして、実際、災害救助犬が役に立ったと考えております。

もう1つは、須賀川市長沼地区のダム決壊でございます。藤沼湖といいまして、だいたい150万立方メートル、150万トンの水があったという所でありますが、この部分で水をせき止めていたところ、この地震によって全部決壊し、完全に水が無くなってしまったという状況です。先ほど地図を見ていただきましたが、須賀川市は内陸部です。しかしながら水害に遭ってしまったということです。これから、南相馬市の映像も見ていただきますが、同じように、鉄砲水で家屋が流され、そして人が流されたという状況です。それでは、映像にまとめましたので、搜索要領等を映像で見させていただきます。

(ビデオ上映)

家屋を中心に捜索をしたのですが、中々見つからないということで、20キロ下流域まで捜索エリアを拡大して捜索しました。ここでも白河市のように災害救助犬を要望したのですが、この市では残念ながら導入していただけませんでした。たった行方不明者4名の捜索でありましたが、非常に困難を極めました。

私どもの部隊は、その後、南相馬市の方の捜索を命ぜられ、このエリアを離れることになりましたので、残り2名の方が見つからないまま、新たに到着した中国地方の部隊に申し送りをして、南相馬市へ移りました。最終的には、2名の方のうち1名が、約1か月後に、更に下流域で発見されました。

(次のスライド) いわゆる生活支援の方も同時並行的に行っておりました。これは、私の地元である郡山市での給水給食支援です。写真では給水しか映っておりませんが、隣で給食の方も行っておりました。これは、先ほど政策補佐官の方からもありましたように、やはりちゃんと並んでいるということが日本人の実態です。夜も長蛇の列ができていたと聞いております。

さて、ここで申し上げたいのは、地震災害というのは、いろいろな観点で教訓事項があったということです。大都市である郡山や、県庁所在地である福島市でも全部断水していました。したがって、避難民を多数受け入れていた県内の主要都市も、実は断水していたわけで、本災害は本当にすごいものであり、被害は甚大だったという印象を受けています。

(次のスライド) さて、3月14日に、実は、先ほど原発付近に陸自の部隊がいますとお話しましたが、その現地部隊から原発が危ないという情報が入り、第12旅団及び第13連隊は郡山に指揮所を構えていましたが、戦闘用防護衣を着ているところの写真です。

では、先ほどの民間の人たちはどうだったのかということですが、残念ながら自治体系統ではそのような民間情報はありませんでした。したがって、私どもができる最小限の形となりましたが、現地部隊から「原発が危ないという情報があります。」という通知を行い、先ほどの給水所エリアは開成山公園の野球場近傍ですが、現地に指示をして、民間の人々を屋根のある施設の中に入れました。これが3月14日の午後です。その日は、水素爆発はありませんでしたので、そこは幸いました。

したがって、危ないという情報についてはしっかりと行政系統を含めて流してもらう必要性を痛感した次第でございます。

その後、3月22日以降、中国地方にある第13旅団という部隊が入ってきましたので、私どもの部隊は、須賀川市や、白河市といった県中南エリアから福島県の北東のエリアの担当に任務変更されまして、特に、南相馬市が活動の焦点となりました。

(次のスライド) この図は報道でご覧になっているかと思いますが、南相馬市の区域は、いわゆる30キロ圏以遠のエリアから、警戒区域である20キロ圏内まで含まれます。飯舘村というのは、実は、30キロ圏以遠にあります。ここ最近は、「SPEED I」という放射線の拡散を予測する図をよく見かけますが、放射線は、福島第一原発から北西方向に特に飛んでいます。飯舘村付近は、線量が非常に高かった地域です。私どもの部隊も、郡山市から南相馬市に行くときに、必ずこの飯舘村を通るのですが、線量

が高く、必ず線量計の数字が上がる地域でした。

(次のスライド)先ほども申しましたとおり、主要な自治体は断水しており、この飯館村も断水しておりましたが、30キロ圏外でございましたから、住民は普通の生活を送っていました。この写真は、22日、給水支援を実施し、トラックで7・8台分のペットボトルをお届けしているところでございます。

(次のスライド)そして、23日以降に活動したのが南相馬市です。南相馬市は小高、原町、鹿島の3つのエリアに分かれていまして、いわゆる10キロ圏以北で、20キロ圏や30キロ圏が含まれておりますが、私どもの部隊はこの色の付いている場所を捜索しましたので、最終的には、10キロ圏までエリアを広げて捜索をしました。捜索については北から押ししましたので、3月23日以降は、鹿島から原町、そして小高という順に捜索エリアを広げております。

(次のスライド)これは、グーグルアースの当時の航空写真の図でございます。このエリアをご確認いただきたいのですが、海と同じ色になっています。ここは水田なのですが、完全に水没しています。本当にこのエリアを見たときに、ここは水田ではなく湖かなと思うぐらいの状況でありました。したがって、当初は、まず、水抜きをどうするかということから始まりました。写真は、4月になってからのものですが、当初は、この辺まで冠水していたということでございます。

私ども部隊は有限です。人の数は限られています。したがって、重点エリアを決めたりしないといけない。そのためには、エリアを細分化して、行方不明者がどの辺にいるかといった情報を、自治体や、警察の皆さんなどから情報を得て、重点箇所を決めて捜索をしていったところであります。

さて、今回の災害の特性にもなるのですが、行方不明者数など数の認識を共有するのが難しいということをご紹介したいと思います。行政担当からいただいた4月18日頃の行方不明者数は約1,000名で、警察からいただいた情報では約770名なのです。約200名違います。どちらが正しいのだということになります。警察の情報というのは、いわゆる捜索願が出た数字でありますので、最低限、この情報を信用しながら重点的に捜索を行ったところであります。また、自主避難の方々が報道されているように多数おられまして、行政側の現場では数字が合わない。現地の災害対策本部でも、数字を合わせるのに時間が相当かかっており、合わせることができたのは2か月くらい後だったと思います。したがって、災害が大きくなればなる程数を把握するのが難しく、実状は、中々分からないと認識しております。

(次のスライド)それでは、捜索要領の1例についてご説明します。まずは、水抜きを行います。大規模な水没エリアについては、国土交通省のポンプで施設部隊等が水抜き行いますが、それでも全部は出ません。その後、消防団が持っている小さいポンプを使用して水抜きを行い、人が入れるようになってから、先ほど説明がありました胴長を着せて捜索を行わせています。当初、隊員に半長靴を脱いで胴長を着せて捜索させたのですが、瓦礫や釘がいっぱいあって、胴長を突き抜けた釘で隊員が負傷するなど、当初はそういう怪我が多発しました。

(次のスライド)もう1つは、かわいそうな実例を紹介するのですが、このエリアは、平地の海拔がほぼゼロメートルに近いという場所であります。ここに、若干の高台があ

りまして、この高台が避難エリアに指定されており、海拔10メートル程度のところ
です。しかし、実は、津波はそれ以上の高さで来ましたので、ここに多数のご遺体があり
まして、当初は、警察がご遺体を引き上げました。この避難エリアに多数の方々が避難
されていて、この後方の池の中に車が数台流されたという情報が、消防団等のみなさん
からありましたので、この写真は池の水抜きをどうしようかと考えている所でございま
す。

(次のスライド) 最終的には、重機を使用して池の側面の一部決壊させて、搜索を致
しました。そして、湖底からご遺体を引き上げました。このエリアは30Km以北でし
たので、多くの住民のみなさんが帰ってこられており、周りで搜索を見ておられます。
そして、ご遺体が発見されますと、住民のみなさんから感謝していただくのと同時に泣
き崩れているシーンが未だに記憶に残っている次第でございませう。

この写真は、残った海水が瓦礫と混ざって、泥の沼のようになっているエリアの搜索
であります。この泥水は、さきほどのポンプだと抜けません。それで、隊員を直接泥の
中にそのまま入れました。本当に、溝のような臭いのところでしたが、隊員は真剣に搜
索をしてくれました。

(次のスライド) 更に、もう1つは、南相馬市のテトラポットの搜索です。海岸線に
つきましては毎日搜索させておりました、1か月近く過ぎた頃以降、海に流されたご遺
体に戻ってくるということがありました。その図でございませう。私も、1か月くらい経
たご遺体を見たのですけれども、本当に体がぶよぶよになっており、触っただけで皮膚
や肉がめくれてしまうようなご遺体でありまして、本当に悲惨な状況でございませう。

(次のスライド) あとは、この重機を活用しながら搜索しないとにつきもさっちもい
かないというところでもあります。当然ながら、警察は、既に搜索を行っているのですが、
瓦礫がそのまま残っていると、住民の皆様が戻った際、行方不明者がこの下にいるんじ
ゃないかと探したことを納得しないわけです。したがって、重機を使ってきれいにする
ということをやりました。

(次のスライド) これは川沿いの搜索の写真でございませう。

(次のスライド) 最終的には特に20キロ圏内の搜索を含め、私もスクリーニングを
しっかりしながら搜索をしたというところでもあります。

それでは、また映像のほうを見ていただきます。

(ビデオ上映)

(次のスライド) 特に20キロ圏内の搜索では、地元の消防団の皆さんとかは、実は
ほとんど残ってなくて、数名しかいませんでした。30キロ圏内は、毎日のように多
数出てきてくれて連携し搜索できたのですが、20キロ圏内はほとんど情報がない中
での搜索になりまして、我々独自で、なんとか部隊をたくさん投入してやったというの
が実情です。私どもの部隊以外にも、千葉県の習志野にある第1空挺団、これは非常
に大きな部隊でありまして、その空挺団長が、現場の広大さを認識されて1, 200名
の隊員を決意して連れて来られた。このことから、その大変さというのがご理解い
ただけるだろうと思います。

本当は、情報に基づいて、重点的に、効率的に搜索できればよかったです、20キロ圏内は厳しかったというふうに思っております。

あと、相当な瓦礫の山を見ていただきましたが、これをいかに撤去するかというところが課題でした。そして、現地の対策本部を通じて、相当数のダンプと重機を要望しました。黄色いのは民間の重機であります。部隊の重機だけでは全然足りなくて、自治体に要望し、なんとか出していただきました。

そして、6月初めに、市長さんに自衛隊の搜索活動についてご報告、ブリーフィングをさせていただいて撤収という形になりました。

最終的には、部内におきましては、指揮官である東北方面総監への状況報告等を終了し、長野に戻ってきた次第であります。

それでは、さきほどの政策補佐官の講演でもありましたが、私の方からも搜索状況をビフォーアンドアフターの写真でご紹介します。

(次のスライド) これは野球場です。マウンドも何も見えないのですが、こんな感じになっています。

(次のスライド) これは20キロ圏内です。

(次のスライド) これは川です。川にも相当な瓦礫が集まっています。川も全部きれいにしたというところでもあります。

(次のスライド) ご覧のとおり、20キロ圏内では野放しの豚がたくさんいました。最終的には、全部を行政側で殺処分していただきました。

特に20キロ圏内は、本当に、丁寧に行いました。隊員がみんなで頑張ってくれいにして、ここに本当にいないだと分かってもらえるくらいにやったというところでもあります。

これは、私どもではありませんが、第12旅団隷下の他の部隊の写真を若干紹介します。

やはり原発、これは報道もされていますが、実は、この住人の皆さんの中に「私は避難しないよ」というような方が、多数おられます。特に、ご病気の方、病人を抱えている方など、なかなか避難しようとされません。それを自治体の方や自衛隊が、なんとか避難してもらうように説得している図です。

(次のスライド) これは、負傷者、患者輸送をしているところで、ヘリで輸送している写真でございます。

(次のスライド) 入浴支援も上級部隊がやりました。残念ながら、第13連隊には入浴設備がありません。したがって、これを開設できるのは、この第12旅団隷下部隊でいえば群馬の部隊、いわゆる後方部隊だけになるのです。そのため、残念ながら、風呂については数的には大きな避難所しか入浴支援のニーズには応えられなかったというのが実情であります。

(次のスライド) あとは物資輸送。やはり、緊急時の物資の拠点は空港又は貨物ターミナルです。ここには、いろいろな物資が届きますので、私どもの部隊も、福島空港からの物資輸送支援も実施しました。

(次のスライド) 以上でございますが、最後に応援メッセージであります。このように、隊員も非常に過酷な任務であったのですが、本当に元気づけられたのがこのよう

応援メッセージであります。これも枚挙にいとまがありません。たくさんいただきました。本当に、私どもからも感謝する次第であります。

こちらに帰ってきてからですが、特に、南相馬市は長期間支援した関係もあり、市長さんにこのような写真をお送りしました。

最後に全体を総括しますが、これだけの災害を経験して、今後、是非とも、何かあったときのために、私どもも平素から自治体の皆さんや、警察や消防の皆さんとよりいっそう緊密な連携をとっていかないといけないと痛感させられましたし、特にこういう災害のときにこそ、私どもが先頭に立って、今後とも活動していく所存であります。

松本につきましては、牛伏寺断層も非常に危険なところでもあります。また、特に3月12日に起こった栄村の地震では、常時、私どもも注視しておりましたが、災害派遣にならないで済みました。今後、長野も災害が多数予想されますので、引き続き、しっかり対応できるよう、準備に万全を期していきたいと思えます。

本当に短い時間ではありましたが、ご清聴ありがとうございました。以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】

横山1等陸佐どうもありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。

(館内拍手)

皆様ステージを変更いたしますので暫くお待ち下さい。

お待たせいたしました。それでは質疑応答に入らせていただきます。本日のご講演に関しましてご質問のある方は挙手をお願いいたします。係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

【質問者1】

今日は、本当に貴重な講演に参加させていただいてありがとうございました。

地方自治体の機能喪失というお話を須藤先生からお聞きしたのですが、この点について、須藤先生と横山先生それぞれのご意見をいただきたいと思えます。よろしくお願ひします。

【回答者(須藤政策補佐官)】

先ほどもお話ししましたように、震災などの非常時には、平素の体制をそのまま引きずっては、かえってうまく対応できないこともあります。ですから、できれば平素から、地方自治体の方には、「想定外」がないよう準備を進めるとともに、それでも「想定外」は必ず起きるものですから、その時に自分たちはどうしたら良いのか、どう対応できるのか、結局対応するのは計画ではなくて人ですから、どうすれば個々の職員が応用力をもって「想定外」に対応できるのか、そういうこと考えながら準備を進め、応用力を身につけていただきたいと思えます。

また、実は、このような自治体との連絡調整は、東北方面総監部における私の仕事でもありますので、震災後は、地方自治体の皆さんと話し合いをしながら、まず皆さんに

非常時のイメージを持っていただいて、非常時の際には、柔軟に対応していただけるよう準備を進めているところです。

【回答者（横山 1 等陸佐）】

私の方からも同様の趣旨になりますが、私は、計画を作ることは非常に意義があると感じております。いかに多くの計画を持って、いわゆる不測事態に臨めるかということです。ただし、現場によって状況も違ってきますので、やはり、平素の訓練が大切になります。いろんな状況を与えられてどう対応するかという訓練とかですが、とても大事であるというふうに思います。従って、今後、いろいろな災害が松本でも予想されますので、是非ともご検討いただければというふうに思いますし、私どもも協力させていただきます。以上です。

【司会】

ありがとうございました。ほかに質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。

【質問者 2】

ここから 30 キロほど北の大町市から来ましたが、私の実家も岩手県です。実家は、糸魚川静岡活断層のほぼ真上にありまして、築 120 年の古い茅葺きの家で、多分 5 強がきたら間違いなく潰れるだろうと、そういう古い家です。私は元大工で、家の解体作業も専門でやっています。そこで、横山 1 等陸佐が最後にお話しになったことに関連しますが、大町市には 6 つの大きなダム、貯水池があります。そして、急峻な地域です。今までは、その危険性についてもあんまり相手にしてくれなかった役場の人も、最近ではいろいろ耳を傾けるようになってくれた、聞くようになったかなと思います。そして、私は、大町もそうですが、長野県の特殊な地形や藤沼湖のダムに非常に関心を寄せておりまして、ずいぶん調べました。また、友人たちと現地に行って調査もしてきました。いろんな写真も見ています。特に、女子中学生が 1 人亡くなっていて、たぶん、その方がまだ多分見つかっていないのではないかと思います。

【回答者（横山 1 等陸佐）】

いや、見つかりました。赤ちゃん、1 歳児が見つかっていません。

【質問者 2】

そうですか。ずっと気にしていたのですが、初めて聞いて、ありがとうございます。

今まで、ずいぶん写真も見たりしたのですが、今日、見せていただいた写真が非常に分かりやすい。ちょっと語弊はありますが、空からのすばらしい写真でした。本日は、この長野県に住む者にとって、教訓がいっぱいあると思いますので、また詳しく教えてください。

【回答者（横山 1 等陸佐）】

ありがとうございます。

【質問者 3】

本当に、被災された姿を目の当たりにし、現地に行った第 12 旅団あるいは第 13 普連の司令から、こういった話を聞くと、本当によく分かります。報道、あるいは新聞で写真を見ただけより、ご苦労されたということが分かるし、原発の避難区域まで自衛隊が行っているということがよく分かりました。それで、心配になったのですが、隊員に被害というのはなかったのでしょうか。また、あと 1 つは、とても残念に思うこ

とがあります。松本市民は20万人もいるのに、今日のこの話を本当の話を現地に行った人以外は知らないと思われることです。いい機会ですから、もっと動員しないと、これでは本当にもったいないと思います。須藤さんも遠くからお出でいただいて、本当にご苦労様です。いずれにしても、こういったテレビあるいは新聞に出ない話を伝えるのが本当の報道だと思いますので、まだこれからもこういった機会があると思いますが、もっと大勢集めて、大勢の人に聞いていただくよう、お願いいたします。以上です。

【回答者（横山1等陸佐）】

はい、今、ご指摘いただいた事項につきましては、しっかりと受け止めまして、できるだけ多くの方に普及していきたいと思います。差し当たって、4月21日、駐屯地記念日行事において、今年は、今回の活動を踏まえて、災害派遣展示の実施を予定しておりますので、もう少しPRをしっかりとやってまいりたいと思います。あと、引き続き自治体を回って、PRしてまいります。以上です。

【司会者】

そろそろお時間となりますが、あと1問だけ質問を賜りたいと思います。

【質問者4】

今、話を聞いていて、本当によく自衛隊の方々はやってくれたということをつくづく感じています。実は、私もボランティアで被災地に行きました。私が4月に行った時もすごく寒かったのですが、この活動が震災の次の日から行われていて、すごい寒さの中で行われていたと思うと、本当に大変だっただろうなということを感じています。ですから、メンタルの面でサポートしているという話を聞いて大変嬉しく思いました。

さて、1つお聞きしたいのは、私たちも、多分皆さんもそうだと思うのですが、あのようなことがあれば、すぐ飛んで行って何とかしたいなと思っていても、実際は、道も通れないので自力では行けません。でも、自衛隊はいろんなものを持っていて、トイレまで持っていますから、どんな状況であっても行くことができます。先ほどの講演で、現地では人手がほしかったとおっしゃっていましたが、そういう点で、民間の人たちにすぐやってほしいことというのは何かありましたでしょうか。そういうことを是非教えていただくと、今後のボランティア活動でも役に立つのではないかと思います。本当は、現地に行って何かお手伝いしたいが、邪魔になるから行けないから、だからせめて、お金をとか物資を送ろうということで支援をしてきたのですが、その辺はいかがでしょうか。

【回答者（須藤政策補佐官）】

ボランティアの方には、4月頃からでしょうか、被災地へたくさん来ていただきました。細かい話は省略しますが、我々も可能な限り柔軟に対応しようとしたのですが、それでも、災害派遣活動では、自衛隊として「できる」と「できない」ことがあります。例えば、民家をきれいに片付けてあげることはできません。したがって、実際にも、我々は民家の周囲の道路などを一生懸命片付けまして、ボランティアの方たちには家の中を片付けていただく。そのような形で活動をしたりしていました。こういうボランティアの方達の協力は、我々にとっても、また、何よりも被災者にとって、

大変重宝だったと思います。

さて、私自身も被災者なので、個人的な気持ちを言いますと、最初はもうとにかくどんなことをしていただいても嬉しいですし、物を送っていただいても嬉しいですし、言葉だけでもいい。物は足りないし、気持ちは落ち込んでいるし、物心両面で全てが足りない状態ですから、とにかく何をしていただいても、決して迷惑になるということはないです。

ただし、自衛隊の立場としては、せっかく支援に来ていただいても、被災地には泊まる場所もないし、食べ物もない状況ですから、「被災地に激励に来ました。食べ物を分けてください。寝る場所を手配してください」ということでは、自衛隊の活動が滞ってしまいますから、本末転倒になってしまいます。したがって、その辺のバランスがちょっと難しい。ただし、個人的には、とにかくどんなことをしていただいても、本当にうれしかったというふうに思っております。

【回答者（横山 1 等陸佐）】

それでは、私の方からご回答させていただきます。今、政策補佐官もおっしゃいましたように、現地に来ていただいて、ボランティアをやっていただくことは本当にありがたいと感じる次第であります。自衛隊も限られておりますので、そこをサポートしていただけるというのは、本当にありがたいことであります。

しかしながら、このような大震災になりますと、現場は先ほどご覧いただいたように、ものすごい状況になりますので、例えば、現場に出ていただくというよりは、どちらかというところ、例えば、給食所の支援など、後方的なところの支援は、逆にありがたいかなと思います。自衛隊は、どちらかというところ、行方不明者に重点を置いて捜索をします。その後、ある程度自衛隊が片付けた後で、我々の捜索できない細かいエリアの捜索とかをやっていただくボランティア活動というのが、現場ではありがたかったというふうに思っております。

ご回答になっておりますでしょうか。全般としては、本当に、そのお気持ちだけでも非常に嬉しく感じている次第であります。以上です。

【司会】

どうもありがとうございました。お時間がまいりましたので、これで質疑応答を終了させていただきます。須藤政策補佐官、横山 1 等陸佐ありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。

（館内拍手）

以上をもちまして、第 2 2 回防衛セミナーの全てのプログラムを終了いたしました。本日はお忙しい中ご来場いただきましてありがとうございました。お忘れ物がないようご注意ください。

また、事前にお渡しいたしましたアンケート用紙は会場内にあります水色ジャンパーを着た当局職員にお渡し下さい。受付に設置しております回収用トレイに入れていただいても結構です。今後のセミナーの参考とさせていただきますのでご協力の程よろしくをお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。